

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25年 6月 1日現在

機関番号：25403

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21720262

研究課題名（和文） 植民地期インドネシアにおける民衆運動と地域社会

研究課題名（英文） Popular movement and Rural society in the Colonial Indonesia

研究代表者

藤田 英里（FUJITA ERI）

広島市立大学 国際学部 研究員

研究者番号：70516012

研究成果の概要（和文）：19世紀後半から20世紀前半のオランダ植民地時代におけるバンテン地域が、なぜ反乱や民族主義運動の中心地となったのか、住民は何を求めてそれらの運動に参加したのかを、農村の階層構造や農業生産力との関連で考察した。

研究成果の概要（英文）：Why revolts and communist movements broke out in Banten in the Dutch Colonial era, from the late 19th century to the early 20th century? Why local people joined those movements? I examined those reasons in connection with class structures and agricultural production capacities in villages.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：インドネシア史・民主運動・地域社会・ジャワ・バンテン

1. 研究開始当初の背景

(1)スハルト政権崩壊後、地方分権化が進むインドネシアにおいて、地域史研究の重要性が増している。しかし、現在のデサ(村落)の元となった植民地期の村落社会についてはなお研究が不足しており、研究者はこれまで、オランダの植民地政策と地域社会側の反応との相互関係の中で、バンテン地方の村落社会がどのように変化してきたかを検討してきた。

バンテンは19世紀初頭にバンテン王国が滅亡した後、オランダの直接支配下に入ったが、反乱が頻発し、住民は反抗的で「ファナティック」であり、非常に統治しにくい地域

としてオランダ人官僚からは認識されていた。そのような特色を反映して、これまでの研究は、その大半が同地域の反乱について扱ったものである。代表的な研究として Sartono Kartodirdjo の *The Peasants' revolt of Banten in 1888* (s Gravenhage, Martinus Nijhoff, 1966) や M. Williams の *Communism, Religion, and Revolt in Banten* (Ohio, 1990) がある。これらで指摘されているのは、イスラームの宗教指導者や旧スルタン王国の貴族、ジャワラ(任侠層)などがこの地域の反乱で指導的役割を果たしてきたことである。実際、ウラマーやジャワラがバンテン社会において非常に大きな

影響力を持つ構造は、岡本正明「分権化に伴う暴力集団の政治的台頭ーバンテン州におけるその歴史的背景と社会的特徴ー」(杉島敬志・中村潔 編『現代インドネシアの地方社会 ミクロロジーのアプローチ』NTT出版, 2006)に見られるように、現代に至るまで継続している。

また植村泰夫「19世紀後半～20世紀初頭ジャワ・マヅラのデサ首長の社会的地位をめぐって」(『東洋史研究』47-3, 1988)の中では、ジャワでは村落首長の社会的地位は地域差が大きく、特にバンテンでは首長の権威が低く、長老が慣習法の維持者として独立した地位を保持しており、ジャワの中でも特殊なケースであると指摘された。

これらをふまえて、研究者はバンテンではインフォーマル・リーダーが重要な役割を果たしているのではないかと考え、長老や地方イスラーム指導者について研究を進めた。また、これまでの研究は、彼らの平時の役割については必ずしも十分に論じてこなかったため、イスラーム同盟地方支部での日常活動を視野に入れて検討した。2006年秋に広島大学に提出した学位論文では、これらのインフォーマル・リーダーが地域社会の自立性にとって重要な役割を果たしており、この地域にはオランダの植民地統治が十分には浸透していなかったことを解明した。しかし彼らの働きかけの対象がどのような人々であり、何を求めて運動に参加したのかについては、必ずしも十分には検討しえず、今後の課題として残されていた。

このような問題を考える際に、動員される側の地域住民が自ら語ることはほとんどないため、この地域の社会経済の分析を通して、彼らがなぜ運動に参加したかを考えてみたい。

(2)これに関連して体系的な議論を展開したWilliamsは、バンテン社会について次のような指摘をしている。

- ①バンテンでは土地が痩せているため、米の二期作や裏作物の栽培ができない。
- ②灌漑が未整備で、水田が少なく乾地での陸稲栽培や天水田の比率が高いため、凶作率が高く、単位面積あたりの米の収量も非常に低い。したがって農業は自給的性格が強い。
- ③農民は19世紀後半から増加する人口圧と税負担に対応するため、首都バタヴィアやランブンのコショウ農園に出稼ぎに行かざるをえなかった。
- ④ジャワ一般と比べ、土地所有者の割合が高く、土地所有の分解が進んでいない。また1人当たりの平均面積はジャワの平均よりかなり狭い。

これに従うならば、バンテン社会は商品経済が十分には発展しておらず、階層分化が比較的少なく全体として貧困な社会ということになり、地方リーダーはそうした社会の小農層の要求を拾い上げたということになる。

しかしこの理解には以下のような問題がある。第1に、この時期のバンテンはかなりの量の米を他地域に移出しており、米作は決して自給的だとは考えられない。第2にバンテンは、ジャワで最も多くのメッカ巡礼者を輩出した地域であり、一概に貧困地域とは言えない。第3にこの議論では、地域差に対する考慮が不十分である。北部の相対的に豊かな人口過密地域と、南部の未開発地域とをまとめて論じるわけにはいかない。第4に、Williamsの史料の使い方には、例えば1930年代のココ椰子栽培拡大の原因を、1880年代に導入された人頭税による税負担の増加から論じるなど、問題が多い。研究者はむしろ運動参加者の主力は、比較的豊かな土地持ち農民であったと考えている。

いずれにせよ、上で掲げた課題を解明するためには、Williamsの水準に留まっている訳にはいかず、バンテン社会について改めて詳細に検討する必要があると考え、研究を進めた。

2. 研究の目的

(1)植民地期バンテンの社会経済構造の特質の解明

特に以下の三点から検討した。

- (a)バンテンにおける住民農業の特質(自然的条件、耕地の開発・整備状況、耕地利用・栽培状況など)
- (b)商業流通の特質(商品作物栽培の販売の特徴や流通の特徴など)
- (c)農民の階層構造の特質

(2)運動参加者の社会的存在形態の解明

運動参加者がどのような社会的存在であったのかを、

- (a)農民経済の特徴
- (b)住民の移動性
- (c)イスラーム信仰のあり方

などから分析し、それを踏まえてこの地域の住民の要求の性格を考察しようとした。

3. 研究の方法

本研究目的を遂行するため、まず植民地期バンテン社会の特徴をジャワの他地域との比較も視野に入れて描き出すことを試み、それを踏まえて、運動に参加した人々の社会的存在形態の解明に重点を置いて研究を進め

る。

その際、分析対象時期を

(a)1880年代から20世紀初頭にかけての不況期

(b)1913年までの相対的好況期

(c)第一次世界大戦期とその直後の経済の悪化

(d)1920年代の経済回復期と1926～1927年共産党蜂起

(e)世界恐慌期

に区分し、各時期について上の問題を考えたい。また北部の相対的に豊かな人口過密地域と、南部の未開発地域との地域差を十分に考慮に入れる。

植民地期バンテン社会の特徴のうち、まず(1)住民農業の特質については、『植民地年次報告』(Koloniaal Verslag, 1849～1930、Indisch Verslag, 1930～1940)、『ジャワ・マドゥラの農業統計集』(Landbouwatlas van Java en Madoera, 2 vols, 1926)、『主要住民作物の収穫面積と栽培面積の統計』(Statistische gegevens nopens de geogste beplante uitgestrektheden der voornaamste Inlandsche Landbouwproducten over de jaren 1916 tot en met 1922, 1924)、『ジャワ・マドゥラ各郡における9つの最重要住民作物の月別平均収量と耕地面積』(Maandgemiddelen en Bouwgrondoccupaties per district van de negen belangrijkste Inlandsche Landbouwgewassen op Java en Madoera in de jaren 1920 tot en met 1925, 1929)、Changing Economy in Indonesiaなどに所収の統計と記事から、①自然的条件と、②耕地の開発・整備状況、③耕地利用・栽培状況を検討する。①では、a)土壌の特徴、b)雨季・乾季の地域的特質と、その栽培サイクルへの規定性(連作・輪作の有無とその特徴)、②では、a)耕地開発の進度、b)耕地の利用法、乾地から水田への移行、c)灌漑整備、水の分配や排水規則、d)凶作率を検討し、③では、水田(流水灌漑田・天水田)、乾地(焼畑、常畑、屋敷地など)などの耕地別分布状況と利用率、また主要作物の耕地別・栽培時期別栽培面積・収穫面積、収穫量などを上に挙げた時期ごとに把握し、その変容過程を明らかにする。

次に、(2)この地域の商業流通の特質を、①商品作物栽培の販売の特徴や、②流通の特徴から検討する。①については、a)主要農作物の自家消費と販売用の割合、b)販売の性格：窮迫の販売か、利潤目的の販売か、c)作物収穫後の販売形態と売却先、精米所の役割、d)公的融資機関(デサ・ルンブン、デサ銀行、一般庶民金融銀行)の役割、e)商人・高利貸しの役割、作物に対する前貸しの有無と利率などを、②については、a)移輸出先、b)移送手

段とインフラ整備の程度、c)流通の担い手などを検討する。そのための史料として、上述の『植民地年次報告』やバンテンにおける『デサの経済』(Samentrekking van de Afdeulingsverslagen over de uitkomsten der onderzoekingen naar De Economie van de Desa in de Residentie Banten, 1907)、『商業と工業』(Handel en Nijverheid, Batavia, 1906)などを利用する他、関連する未刊行植民地文書の収集を、オランダの国立総文書館やライデン大学、オランダ国立民族研究所(KITLV)で実施する。

最後に、(3)では(1)、(2)のような特質がこの地域の農民階層構造にどのような影響を与えていたかを考察するため、『福祉減退調査』(Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, Batavia, 13 vols, 1905-1914)や、その理事州別報告書の『農業』(Den Landbouw, Batavia, 1906)、『灌漑』(De Irrigatie, Batavia, 1907)などを史料として利用し、a)土地所有者と土地なし層の割合、その地域的差異、b)土地権の特徴、土地の売却や質入れに対する共同体規制のあり方の特質、c)一人あたりの土地所有面積、d)土地集積の有無とその原因、e)雇用労働のあり方、f)職田の有無、職田所有と経営の特徴、g)村落会議参加者、労役負担者と土地所有との関係などについて検討を加え、バンテンの農業と地域の社会構造に関する概観を得る。

さらに、運動に参加した人々の社会的存在形態の解明に重点を移して研究を進める。そのため、(1)農民経済の特徴を、これまでの計画で取り上げた商業流通の特質と関連づけて検討し、(2)住民の移動性についての研究と併せて、モノやヒトの流通を明らかにしたい。その上で、(3)この地域のイスラーム信仰のあり方を、メッカ巡礼と関連づけて検討し、最後にこれまでの分析結果を踏まえて(4)バンテン地域の住民が求めていたものは何かについて考察する。

(1)農民経済の特徴については、a)収支内容の分析、b)税負担の種類とその変化、c)農民負債のあり方の検討を通じて、農民の高利貸しに対する経済的従属度が相対的に低かったことを明らかにしたい。そのため上に挙げた史料の他、『バンテンの法と治安』(Samentrekking van de Afdeulingsverslagen over de uitkomsten der onderzoekingen naar het Recht en de Politie in de Res. Banten, 1907)から関連する裁判記録を、『ジャワ・マドゥラの住民労役に関する調査の最終提要』(F. Fokkens, Eindresumé van het bij besluit van den

Gouverneur-Generaal van 24 Juni 1888 no.8 bevolen Onderzoek naar de Verplichte Diensten Inlandsche Bevolking Java en Madoera,1902)などから、この地域の労役や税負担に関する記事を集める。

(2)住民の出稼ぎに関しては、『バンテン理事の引継覚書』(Memorie van Overgave in Banten, 1906~1937)を参照するとともに、出稼ぎ先バタヴィア、ランブンにおける状況も、それぞれの地域の『引継覚書』から関連する記事を収集する。a)住民の移動の頻度と費用、その目的、b)移動先での定住の有無を検討することにより、住民の移動性の高さが、Williams の言うような貧困のための移動のみに起因するのではないことを明らかにしたい。

またもう一つの重要な移動先であるメッカ巡礼に関しては、(3)イスラーム信仰のあり方と併せて検討する必要がある。a)メッカ巡礼者(ハジ)の数の変遷、b)ハジの地域社会における影響力、c)宗教的実践(毎日の礼拝や金曜礼拝への出席、喜捨や宗教教育など)の実態、d)宗教税や寄付、宗教義務実践のための費用の検討から、バンテンの住民にとって、イスラーム信仰はどのような意味があったのかを考えたい。巡礼者の数やハジの分布等については『植民地年次報告』を史料として使うが、オランダ国立総文書館で、『植民省文書』(Mail Rapport, Verbaal)や、当時ジェッダにあったオランダ領事館の報告書の中から関連記事を丹念に拾い上げる必要がある。そのため、オランダやインドネシアの国立公文書館、国立図書館で調査を行う必要がある。

最後に、(4)バンテン地域の住民の要求について分析を加える。そのための手がかりとして①反乱参加者の裁判記録を利用し、反乱参加の理由を検討し、②イスラーム同盟、共産党など民族主義運動の集会や機関紙への投稿で表明された内容を検討し、(1)~(3)の分析と照らし合わせて、そのような要求が出てきた背景を考える。①に関しては、上述したオランダ国立総文書館所蔵の『植民省文書』の中から関連する記事を探す。②に関する史料は、インドネシア共産党については、『バンテン共産党蜂起の調査委員会の報告書』(Verslag van de Commissie voor het onderzoek naar de oorzaken van de zich in de maand November 1926 in verscheidene gedeelten van de residentie Bantam voor gedaan hebbende on geregeldheden)、イスラーム同盟に関しては、Sarekat-Islam congres: 17-24 Juni 1916 te Bandoeng, Batavia, 1916 などの4回にわたる全国大会の記録から、大会参加支部の要求を抽出する。

また、バンテン支部の機関紙 Mimbar、イスラーム同盟党バンテン支部機関紙 Pengharapan Banten、さらにインドネシア国民党(PNI)については、De Banten Bode などの新聞を参照する。

4. 研究成果

(1)一つ目の研究成果は、西ジャワ・バンテン地域における世界恐慌の影響について検討したことである。バンテンは、ジャワの他地域のような外国人経営による輸出向け作物の栽培が盛んでなく、産業の中心は住民による米とココヤシの栽培であった。こうした地域における住民の生活に、世界市場の変動がどのような影響を与えたのかはこれまでほとんど解明されていない。私は、オランダの国立総文書館やオランダ国立民族研究所(KITLV)で集めてきた一次史料を元にこれらを検討し、名古屋大学で2009年6月に開催された東南アジア学会の中部例会でその成果の一部を報告した。

(2)第二の成果として挙げられるのは、バンテン人の最大の現金収入源の一つであった南スマトラ・ランブン地域への出稼ぎに関して、その実態と、彼らがランブン社会で果たした役割について検討したことである。

コショウ栽培が盛んで人口密度の低いランブンでは、収穫期における貴重な労働力として、バンテンからの出稼ぎ労働者がジャワ人移民と共に重宝されており、ランブン社会において非常に重要な役割を果たしていた。その成果の一部は東南アジア学会の学会誌である『東南アジア 歴史と文化』第38号に掲載された。

(3)また、これまでバンテンは貧しい地域と言われてきたが、毎年多くの者が莫大な費用のかかるメッカ巡礼に出かけられた地域でもある。この理由として、米やココヤシの商品化が進んでいたことと、首都バタヴィアやランブンへの出稼ぎ労働により多額の現金収入が得られたことを解明した。そしてシンガポールのリヴァープールホテルで2010年6月に開催されたアジア史研究者協会(IAHA)第21回大会において、Indonesia: Administering an archipelago in the 20th Century というテーマでオランダ人、インド人、インドネシア人の若手研究者と共にセッションを組んでパネル・ディスカッションを行い、ランブンにおける移住政策の概要と、それが現地社会に与えた影響について説明した。

(4)さらに、バンテン地域からの最大の出稼ぎ先である南スマトラ・ランブン地域の実態を検討した。これまではバンテン地域の村落首長の社会的地位および村落共同体の変容について検討を進めてきたが、今回、ジャワ以外の地域においてオランダ植民地政庁の介入がどのように地域社会に影響を及ぼしたのかを解明することで、バンテンや他のジャワの事例とその変容過程を比較検討することを目指したものである。その結果、ランブンにおける村落共同体「マルガ」は、一度はオランダ植民地政庁の介入で消滅したと言われたが、20世紀初頭から慣習法学者の台頭により再評価され、その際に新たに設定されたマルガ領域及びその首長が現在のランブンのデサ(村)及び村長の起源となっていることを解明した。またこうした一連の政策によって、地域社会側からどのような抵抗運動が生じたのかも明らかにした。

これらの成果の一部を、京都大学で2010年7月に開催された東南アジア学会関西例会や、10月に広島大学で開催された広島史学研究大会東洋史部会で報告した。

(5)加えて、これまでの研究成果に基づき、19世紀後半から20世紀前半のオランダ植民地時代におけるバンテン地域が、なぜ反乱や民族主義運動の中心地となったのか、住民は何を求めてそれらの運動に参加したのかを農村の階層構造や農業生産力との関連で考察した。

第一次世界大戦末期、船腹不足による海上輸送の停止や大規模な凶作、スペイン風邪大流行により、ゴムや砂糖などの輸出向け商品作物の栽培に特化した地域では大きな打撃を受けた。しかし現地向けの米やココヤシの栽培が盛んなバンテンでは、これらの影響は大きくなく、北部ではバタヴィアやランブンなどの周辺地域へ米が移出され、一貫して米の余剰地域であったこと、またランブンへコショウ収穫期に大量のバンテン人が出稼ぎに行くことで、まとまった現金収入を得る機会があったことなどが明らかになった。

植民地政府から見た場合、バンテンは経済的に重要な地域ではなかったが、そのぶん上からの介入は少なく、比較的豊かな土地持ちの中には、メッカ巡礼に行く経済的余裕があった者が多かったと考えられる。こうした層が、自分たちの要求を上伝える際の仲介として、民族主義運動や農民反乱などの機会を利用したと考えられる。

(6)最後に、これらの研究を進めるために、オランダの国立総文書館やオランダ国立民族

研究所(KITLV)、インドネシアの国立文書館や国立図書館、インドネシア銀行(旧ジャワ銀行)などで、大量の新聞や雑誌記事、調査報告書等を収集した。インドネシアではまだ多くの史料が十分なインデックスもなく手つかずのままであり、これらの一時史料を収集し、整理して使える状態にするだけで途方もない時間がかかる。現在も調査は継続中であるが、これらの貴重な史料を収集したことこそが最大の成果の一つであり、今後それらを生かしてさらなる研究に役立てたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計1件)

①藤田英里、初期ランブン移住政策とジャワ人移民 -1905年から1920年代まで-、東南アジア 歴史と文化、査読有、第38号、2009、pp.141-167

〔学会発表〕 (計5件)

①藤田英里、世界恐慌とバンテン地域社会、第215回東南アジア学会中部例会、名古屋大学、2009

②Eri Fujita、Lampung Local Society and Javanese Settlers in the Early Twentieth Century、21st International Association of Historians of Asia、River View Hotel、Singapore、2010

③藤田英里、ランブン・マルガ制研究事始め、東南アジア学会関西例会7月例会、京都大学、2010

④藤田英里、南スマトラ・ランブンにおける地方行政政策とマルガ制、2010年度広島史学研究大会 東洋史部会、広島大学、2010

⑤藤田英里、ランブンにおける地方行政政策とマルガ制、東南アジア研究会、東京大学、2011

〔図書〕 (計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

藤田 英里 (FUJITA ERI)

広島市立大学 国際学部 研究員

研究者番号：70516012

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：